

海外留学における国内学生の「グローバル能力」調査

○星 洋

(社団法人 行動特性研究所)

キーワード：行動特性 グローバル能力 大学別比較

1. 問題意識及び調査方法

留学前後のグローバル能力の向上(変化)を数値化して留学効果の検証を試みた。グローバル能力はグローバル人材育成推進会議(2011)を参考に①コミュニケーション力6項目②問題解決力6項目③グローバルマインド5項目④グローバルビヘイビア5項目(以下、「グローバルに必要な4つの力」という)の22項目を測定対象とし、留学前後に心理テストで測定した。

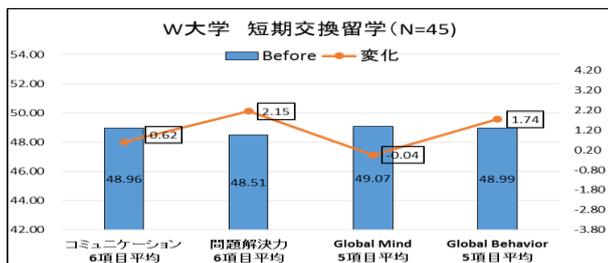
測定ツールとしては行動特性を測定対象としている行動特性診断テスト(行動特性研究所 2017)を採用した。オルポート(Allport, G. W.)やアイゼンク(Eysenck, H. J.)に代表される性格特性を対象にした一般の心理テストは内的要因の一貫性や安定性を前提に作成されているため、変化の測定には不向きである。それに対して行動特性とは特定の状況下で観察された傾性概念(disposition concept)であり、性格特性のように通状況の一貫性を仮定した理論的構成概念(theoretical construct)ではないため、変化の測定には適していると判断した。

また、能力をその構成要素である行動特性によって測定する方法は、「コンピテンシーとは行動に表れる能力、特性であり、結果や成果と結びつく能力、特性である」とした人事院人物試験技法研究会(2006)やWHOのGLOBAL COMPETENCY MODEL(World Health Organization, 2017)の考え方を参考にして取り入れた。

2. 調査結果

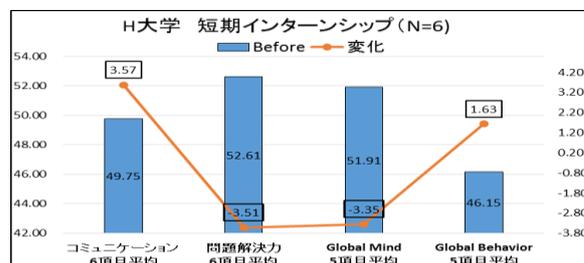
「グローバルに必要な4つの力」の変化測定は三つの大学(W大学、H大学、S大学)の国内学生を対象に留学前と帰国後に行動特性診断テストによる測定値の比較により導いた。

W大学ではコミュニケーション力が0.62、問題解決力が2.15ポイント、Global Mindが-0.04、Global Behaviorが1.74ポイントという変化が生じた。

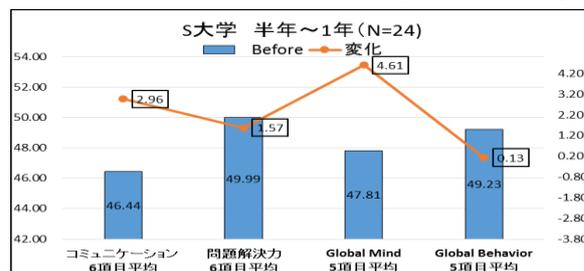


H大学ではコミュニケーション力が3.57、問題解決力が-3.51、Global Mindが-3.35、Global Behaviorが

1.63ポイントという変化が見られた。



また、S大学ではコミュニケーション力が2.96、問題解決力が1.57、Global Mindが4.61、Global Behaviorが0.13ポイントという変化が見られた。



3. 考察と今後の課題

語学留学(留学期間1ヶ月)を目的としたW大学では問題解決力やGlobal Behaviorという実践的な能力が向上し、海外インターンシップ(留学期間1ヶ月)を目的としたH大学ではコミュニケーション能力が大きく向上した。一方、留学期間が長期(1年間)であったS大学(交換留学)では具体的な行動よりもGlobal Mindの変化が高かった。

上記の結果から、留学の目的や期間が留学中の行動に影響を与え、行動の変化が能力向上の起因となると推測される。また、能力変化を数値化することにより留学効果の明確化や学生のプログラム選択への指針として活用できると思われる。

今後は調査対象の大学や留学プログラムの目的別・期間別の調査数を拡大して本調査の検証が必要である。また、留学先の国・都市・大学別の調査も重要であると思われる。

【引用文献】

グローバル人材育成推進会議(2011)。「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」
人事院(2006)。「人事管理情報 人物試験におけるコンピテンシーと「構造化」の導入」『人事管理』355:39
World Health Organization(2017)。

http://www.who.int/employment/WHO_competencies

行動特性研究所(2017) http://iobt.jp/?page_id=339

(ほし ひろし)